



TITLE:

# 北支那最古の文化相：北平研究院の活動

AUTHOR(S):

水野, 清一

---

CITATION:

水野, 清一. 北支那最古の文化相：北平研究院の活動. 東洋史研究 1937, 2(6): 597-597

ISSUE DATE:

1937-09-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138762>

RIGHT:

## 北支那最古の文化相

## 北平研究院の活動

北平研究院が調査を繼續中の陝西寶雞縣關鷄臺の遺蹟は今年度の發掘において車馬を殉葬した古墓が現れた。車馬の形狀は頗る完好整齊で、第一乗の一車二馬は既に發掘を了し、第二乗の一車二馬の出現を見たが、今秋の再發掘を期し、凡てを再び坑中に埋没し、縣當局に監督を依頼して引揚げたさうである。また從來報ぜられてゐた仰韶彩陶期以前のいはゆる新石器文化層なるものについても、やや詳細な報告が『院務彙報』上に登載された。それによれば、該地にはまづ半米の表土あり、ついで一米の黒褐色土層（仰韶文化層）あり、さらに下つて生黄土層あり、こゝにその新石器期の遺址と三代の瓦甬墓、及び漢墓などが掘込まれてゐるのである。そのうち問題の新石器遺址は六所あつた。第一は圓形の堅穴で、口や、開き、正に『詩經』の「陶復陶穴」を思はすものである。土器は接合の結果

四五を復原しえた。第二は角丸長方形の堅穴で、底及び壁面に極く薄い石灰の上塗りを殘す。土器片出づ。第三は圓形の穴、口や、ひろがり、深さ七米八十、用途不詳。土器片あり。第四は第一に同じ、人骨頭蓋四、猪骨あり、堅穴底部破損す。第五は石灰土塗りの壁と床をもつ堅穴、西壁の一部缺けてゐるのは入口を示すがごとくである。中央に圓形の凹みあり、深さ數厘。爐址である。土器片若干。第六は土器製作場で、面積は廣い。南部に二個の窯址があり、土器碎片が散布する。西北部に一小池あり、深約二十厘。さらに南方、やゝ東に一溝がある。溝の北壁に瓦罐一個を横に嵌ませしめ、口を溝壁に開く。この北にまた一小池あり、深さ大小は右の溝にはゞ相類する。東西兩壁に小さい坎臺各々二あり、おそらく火をいれて物を焼つたものと考へられる。場所は今全體に平らかつた、一二厘の厚い層があり、燒けてゐて堅い。右の六所のほか、なほ石灰の壁や床は所々に見出されたといふ。

土器は色彩、土質において仰韶彩文土

器と大差なく、赤色・灰色・黒色で、彩文の加飾はない。仰韶土器に比するとやや粗糲である。繩文は仰韶期・瓦甬期のものに同じであるが、籃文—わが國で條痕と稱するものに似たり—及び細刻文や點狀文は特有である。形は(1)口のひろい、淺い盤洗の類、(2)口はひろく、やゝ深く、圓底或は平底の盃の類、(3)深く直立し、平底、口唇は少しく折れ、或は彎曲する水缸の類、粗繩文あり、(4)鼓胴、尖底、頭の細い壺類、細繩文あり。前二者は特に精美、後二者はやゝ粗糲だといふ。

これによつて、彩陶文化以前の一新石器文化の概貌はわかつたわけであるが、徐炳昶氏はさらに語をついで、アンデルソン博士が仰韶文化よりも古いとする、河南渾池縣不招寨のごときはむしろ反對に新しく、瓦甬墓の時期であり、また甘肅齊家坪の最古遺蹟も、單に土器作風の上からする推測にすぎない。したがつてこの關雎台戴家溝の無彩文紅陶文化こそは、北支那で今日までに知られてゐるものとも古い文化であると斷するのである。

M Z N